

Henry Fielding の *Tom Jones* における 「人間」と「心」と「哲学・宗教」

児 玉 啓 介

は じ め に

Fielding は *mind* という語に関心を持ち、その具体的あるいは比喻的意味を考えながら、*Tom Jones* の中でその語を効果的に用いている。*mind* だけでなく、*heart*, *spirit*, *soul*, *sense(s)*, *eye(s)*, にも同様に関心を持ちながら、さらに心の力、状態、特質を表わすいろいろな語や、感情 (feelings) を表わす語もしばしば用いている。

Fielding は感情を表わす語を使って、*Tom Jones* の中で何を描こうとするのか。それは man である。

Man ...is the highest subject (unless on very extraordinary occasions indeed) which presents itself to the pen of our historian, or of our poet; and, in relating his actions, great care is to be taken, that we do not exceed the capacity of the agent we describe. (Book VIII, Chapter I)

「人間こそわが作家の、わが詩人のペンに現れる（もし実際に非常に異常な場合でないならば）最高の主題である。だから、人間の行為を述べる際に、私達が描く行為者の能力を越えないように大いに注意することである」と彼は言う。

Fielding が描こうとするのは人間であり、その行為者の能力を越えないように注意すると言うが、それではその人間を描くにはどんな語を用いるのが効果的かと言うと、*mind*, *heart*, *spirits* などの語を初め、感情を表わす語を使用することである。Fielding が狙っている人間の中で理想的男性は

His mind was, indeed, tempered with that philosophy which becomes a man and a Christian. He affected no absolute superiority to all pleasure and pain, to all joy and grief; but was not at the same time to be discomposed and ruffled by every accidental blast, by every smile or frown of fortune. (VI, III)

「その心が男性にそしてキリスト教徒にふさわしいあの哲学で実際に柔らげられており、すべての喜び苦しみより、すべての楽しみ悲しみより、絶対に勝れていないふりをし、同時にあらゆる偶然の強風によって、運命のあらゆるほほえみまたはしかめっつらによって平静が失われたり乱れたりはしない」Allworthy 氏であり、Fielding が狙っている理想

の女性

She had lived about the court, and had seen the world. Hence she had acquired all that knowledge which the said world usually communicates; and was a perfect mistress of manners, customs, ceremonies, and fashions. Nor did her erudition stop here. She had considerably improved *her mind* by study. (VI, II)

「宮廷あたりで生活し、世間を知っており、そのために宮廷の人々が大抵伝えるあの知識を全部身につけており、風俗・習慣・儀式・流行を備えている完全な女性であり、その博学はこの程度で止らず、研究によって自分の心を相当上達させていた」Western 夫人である。

この研究では Jones と Sophia がこの物語の中でどのように生きて行くかを上記の語を中心にして追求するのがその目的である。

1. Mind について

Tom Jones の中で *mind* という語の使用は *heart* より少ないが、重要な役割を果たしている。全体的に見て「よい心」(good mind)の方が「悪い心」(bad mind)より少ない。その理由はこの項の最後で述べることにするが、この研究の中では「良い心」の方に重点を置いて追求したい。

ある日 Western 氏が愛娘の Sophia を狩猟に連れて行く。二日目の狩を終えて Sophia が自分の家の近くまで来た時、彼女の乗った馬が突然暴れだす。少し離れたところにいた Jones は自分の馬から跳びおりて Sophia を助けに急ぐ。彼女が暴れている馬から振り落とされようとした時、Jones が腕に彼女を抱き込む。が運悪く Jones は左腕を折ってしまう。このために Sophia は心配し、優しさ一杯の顔を彼に向け

...it (i.e. the look) almost argued a stronger sensation in *her mind*, than even gratitude and pity united can raise in the gentlest female bosom, without the assistance of a third more powerful passion. (IV, XIII)

「感謝と憐れみの感情さえ、別の力強い感情の助けがなければ、女の最も優しい胸の中でも起すことのできない心の中の強い感情をその顔は殆んど表わす」のである。

Sophia のこの時の感情は

the noble disinterested friendship, the melting love, the generous sentiment, the ardent gratitude, the soft compassion, the candid opinion; and all those strong energies of *a good mind*, which fill the moistened eyes with tears, the glowing cheeks with blood, and swell the heart with tides of grief, joy, and benevolence. (XIII, I)

「気高い私心のない友情，ほろりとさせる愛，寛大な情，熱烈な感謝，優しい同情，率直な意見であり，潤んだ眼を涙で満たし，燃える頬を血で満たし，悲しみと喜びと慈悲の潮で胸を脹らます善良な心の持つその強いエネルギー全部」から溢れ出て来るものであっただろう。

Sophia はこのような感情のほかに，いろいろなことに気づく眼を持っている。Jones と話をしている時彼の顔色を見て，

She soon perceived these agitations of *mind* in Jones. (V, VI)

「Jones の心の動揺に気づき」ただ気づくだけでなく，その原因までもすぐ発見するのである。Sophia は Jones の彼女に対する振舞いの原因が彼女自身にあることを発見して，彼女の心の中には尊敬と憐れみが起る。彼が引込み思案であること，彼女を避けること，それに冷淡や沈黙が彼女を出しゃばらせ，熱心にし，暖くし，おしゃべりにさせ，彼女の物わりの良い優しい心に非常に激しく作用するので，

...she soon felt for him all those gentle sensations which are consistent with a *virtuous and elevated female mind*. (V, VI)

「彼女は女の有徳の気品ある心と一致するあの優しい感情を全部彼に対してまもなく感じる。」要するに尊敬と感謝と憐れみが起しうるすべてのもの，実際に一番優しい心の細やかさ，一言で言えば，彼女は彼を激しく愛しているのである。

Sophia はこのような心の細やかさを持っているし，一方 Jones は彼女のことを

She is all over, both in *mind* and body, consummate perfection. She is the most beautiful creature in the universe; (XV, IX)

「あの人は心も体も何もかも最高に完璧です。宇宙で最高に美しい人です」と言う。

Fielding は心と体を同一視しているし，特に Sophia については

Her mind was every way equal to her person. (IV, II)

「彼女の心はあらゆる点で体と同じである」と述べている。心身共に完璧な女性だけでなく最高に美しい女性を作者は描こうとする。

物語がいよいよ終りに近づき Sophia が Jones に向ってあなたの言葉を信じていいかと尋ねると，僕の言葉は信じないでほしい。それよりもいい証拠，僕が志操堅固であった保証を持っていると言いながら，彼は Sophia を鏡の前に連れて行く。

there, behold it (i. e. the security) there in that lovely figure, in that face, that shape, those eyes, *that mind* which shines through these eyes; (XVIII, XII)

「ほら，あの美しい体，あの顔，あの形，あの眼，眼から輝き出るあの心をごらん」これ

を自分のものにする男が不真面目になれるだろうか。そんなはずはない。ねえソファイアと Jones は言う。Jones のこれまでの生活は

a constant struggle between honour and inclination, which alternately triumphed over each other in *his mind*. (V, VI)

「名誉と脱線（血気）との絶えざる闘いであり、この二つが交互に彼の心の中で勝ち誇っていた」のであるが、これから先は精神的にも肉体的にも堅固に暮して行くと誓う。

Fielding は精神的なものと物質的なものを対照させて、Jones に次のように言わせる。僕はこれまでほんのわずかなものに満足していました。Allworthy さんの財産には目もくれたことはありません。（中略）

I had rather enjoy *my own mind* than the fortune of another man.
(XII, X)

「僕はどちらかと言えば他人の財産よりむしろ自分自身の心を楽しみたいのです。」「自分自身の心を楽しむ」というのは Jones のこれまでの人生が名誉と脱線の連続であり、小さなものにこだわらずに快活に前進する彼の性格を十分物語っている。

Fielding は Jones に更に次のように言わせる。

What is the poor pride arising from a magnificent house, a numerous equipage, a splendid table, and from all the other advantages or appearances of fortune, compared to the warm, solid content, the swelling satisfaction, the thrilling transports, and the exulting triumphs, which a *good mind* enjoys, in the contemplation of a generous, virtuous, noble, benevolent action? (XII, X)

「寛大な、有徳の、気高い、慈悲深い行為を考慮すると、善良な心を楽しむ暖い充実した喜び、大きくなる満足感、わくわくさせる上機嫌、歓喜する勝利感に比べて、豪荘な家、無数の器具一式、素晴らしいテーブル、その他財産の強みまたは外見から生じるあの貧弱な高慢は何であるか。」「content」「satisfaction」「transports」「triumphs」という精神的なものと「house」「equipage」「table」「fortune」という物質的なものを比較させている。

以上 *Tom Jones* 中の「good mind」の現われるコンテクストから Jones と Sophia に関する描写を考察して来たのであるが、前述のように「よい心」の描写が少ないのは

the human mind, since the fall, was nothing but a sink of iniquity, till purified and redeemed by grace. (III, III)

「人間の心はアダムの墮落以後、神の恵みによって清められ救われるまでは、不正の溜り

場にすぎなかった」という考え方からであり、「真理の発見者は金（gold）の発見者と正に同一人である。真理の探究と金の探索両方に用いられる方法は全く同じこと、即ち汚らしい所を捜し、掻き回し、調べることであり、

indeed, in the former instances, into the nastiest of all places. A BAD MIND.(VI, I)

実際、前者の例においては、あらゆる場所の中で一番汚ない所である悪い心を調べることであり」という考え方から生じているのである。

Fielding は一般的な心については次のように考えている。

some of the most excellent faculties of *the mind* may be employed to much advantage, since it is a more useful capacity to be able to foretell the actions of men, in any circumstance, from their characters, than to judge of their characters from their actions. The former, ..., requires the greater penetration; but may be accomplished by true sagacity with no less certainty than the latter. (III, I)

「心のもつ最も優秀な能力のうち大いに有利に使用されるものがあるかも知れない。というのは人の性格をその行為から判断することよりも人の行為を、どんな状況においても、その性格から予言できることの方が役立つ能力であるから。予言できることの方が判断できることよりも大きな見抜く力を必要とするが、真の賢明さによって同様に確実に成就されるかも知れない」

Fielding は心のもつ能力または力を問題にしているが、事実から予言する能力と事実から判断する能力を考えているのである。この考え方に時間の概念を利用して考えると、人の性格（過去と現在）をその行為（過去と現在）から判断する（現在）ことよりも、人の行為（現在と未来）をその性格（過去と現在）から予言できる（現在と未来）ことの方が役立つ能力であると言うのであり、前者は過去と現在を、後者は過去と現在と未来を問題にしている。前者の時間は過去から現在までで止まるような感じがするが、後者の時間は過去・現在・未来という一連の流れを感じることができる。従ってこの考え方をこの物語に登場する人物にあてはめると、人の行為をその性格から予言できる能力を持っている読者は物語を最後まで読まなくてもその結果が理解できるし、その予言できる能力に加えて真の賢明さを持っていれば、この物語は十分理解できるのだと Fielding は主張するのである。

2. Heart について

Tom Jones の中で *heart* という語の現われるコンテキストを注意深く読むと、*mind*

の場合と同様に, 'good heart' よりも 'bad heart' についての表現の方が遥かに多い。その理由は前項の A BAD MIND についての Fielding の考えと同様のことが言えるからだろうが, *heart* についても Jones と Sophia の「良い心」に焦点をあてながら論じてみたい。

Jones と Sophia 二人に関する心 (heart) の描写は Book I V, Chapter V I から始まる。青年 Jones は Sophia のもつ数々の魅力に気づかないのではないし, 彼女の美しさが大いに気に入って他のあらゆる条件も尊敬しているけれども,

she had made, however, no deep impression on *his heart*; (IV, VI)

「彼女はやはり彼の心に深い印象を与えなかった」が, 実は,

his heart was in the possession of another woman (i.e. Molly). (IV, VI)

「彼の心はもう一人の女に奪われている」のである。というのは,

she (i.e. Molly) had in that dress conquered *the heart of Jones*, (IV, VII)

「彼女は例のドレスを着て Jones の心を征服していた」からである。

このように Jones は Sophia と Molly のことで動揺していたある日, 獵から帰る Sophia が馬から落ちそうになって, Jones がやっとのことで助けるといふ事件が起るが, この時の Jones の振舞が非常に勇敢であると Sophia は受取り,

it (i.e. the behaviour of Jones) made a deep impression on *her heart*; (IV, XIII)

「その胸に深い印象を与える」というのは, これほど一般的に男性を女性に推薦する特質はないからである。Jones が Sophia を助けたその時,

the charming Sophia made no less impression on *the heart of Jones*; (IV, XIII)

「魅力のある Sophia の方もやはり Jones の胸に印象を与える。」実は彼は彼女の何とも言えない魅力に気づくようになっているからである。

腕を折った Jones が一室に閉じこもっている時, Sophia の優しい看病を受ける。彼は彼女に対して自分では気づかない位強い感情を抱くようになる。この尊敬すべき女性が彼の愛に確かに応えてくれる時,

His heart ... brought forth the full secret, ... (V, II)

「彼の胸には十分な秘密が生まれる。」一方,

児玉： Henry Fielding の *Tom Jones* における「人間」と「心」と「哲学、宗教」

His own heart would not suffer him to destroy a human creature (i.e. poor Molly) who he thought loved him, and had to that love sacrificed her innocence. *His own good heart* pleaded her cause; (V, III)

「彼が自分を愛してくれて、その愛に純潔を捧げてくれたと考えている一女性を彼自身の心はどうしても見殺しにしたいではない。彼自身の善良な心が彼女の（現在置かれている気の毒な）原因を弁護する。」

このころの Jones の心は Sophia の方よりも Molly の方へ傾いているが、その彼の心を虜にするちょっとした事件が起る。それはある晩 Sophia が父の好きな曲をハーブシコードで弾いていると、彼女の右腕にはめてあるマフが指のところまでずり落ちて演奏が中断される。これが父親の気に障って、彼女の手からそのマフをひったくって、呪いながら暖炉の火の中に投げ捨てる。Sophia はすぐそれを拾い上げるという事件である。比類のない Sophia の魅力、彼女の眼のきらきら光る明るさ、うるむ優しさ、声の調和、体の調和、

not all her wit, and good-humour, greatness of mind, or sweetness of disposition, had been able so absolutely to conquer and enslave *the heart of poor Jones*, as this little incident of the muff. (V, IV)

「彼女の機知、上機嫌、心の大きさ、あるいは気立ての優しさのいずれもこのマフの小さな事件ほど気の毒な Jones の心を全く征服し虜にできたものはない。」Jones の（心の）城は今や不意打を食わされ、

All those considerations of honour and prudence, which our hero had lately with so much military wisdom placed as guards over the avenues of *his heart*, ran away from their posts, and the god of love marched in in triumph. (V, I V)

「名誉と慎重のあのいろいろな考えをわが主人公が非常に軍事的知恵を働かして彼の心の各通路に見張りとして最近配置したばかりであるが、その考えがそれぞれの持場を離れて逃げて行くので、恋愛の神が意気揚々と行進して来るのである。しかし

this victorious deity easily expelled his avowed enemies from *the heart of Jones*, ... (V, V)

この勝利の神が Jones の心から誓いの敵を容易に追い出す」けれども、彼自身が心に配置した守備隊を何かに代えるのは難しい。

his heart was now, if I may use the metaphor, entirely evacuated, and Sophia took absolute possession of it. (V, VI)

「彼の心（の守備隊）は今や、比喻を使うと、全く引き上げており、Sophia がその心を

すっかり占領する。」彼は限らない熱情で彼女を愛し、彼女の優しい感情を明かに知る。

Sophia が幼い頃、可愛がっていた小鳥が逃げたことがある。この時の Jones の振舞に対して初めて愛の種が彼女の胸にまかれたのであろうが、

that affection ... now arrived to such maturity in *her heart*. (V, VI)

「あの時の愛情が今や彼女の心の中で大きく成長している。」

6月のある夕方 Jones が美しい木立の中を歩きながら Sophia の美しいことを限りなく空想し、想像力をたくましくして、その魅力のある乙女をあれやこれや考えていると、

his warm heart melted with tenderness; (V, X)

「彼の暖い心は優しさで和らいで来て」まるで Sophia を眼の前にして語りかたりかけるかのように独言を言い始める。その終りのところで、

Oh! *my fond heart* is so wrapt in that tender bosom, that the brightest beauties would for me have no charms, ... (V, X)

「ああ、僕のか弱い心はあの優しい胸にこんなに包まれているので、一番素晴らしい美人でも僕にとってはどんな魅力も持たない。」ソファィア、ソファィアだけが僕のものであると言いながら有頂点になる。このころ Sophia の方はおちついているが、Jones の方は愛というものが彼の心を全く虜にしている (VI, II)。このような状態にある時、Jones と Sophia が愛しあっていることが Western 氏にわかってしまって、怒った彼は Allworthy 氏に二人の様子を知らせる。Blifil と Thwackum も Allworthy 氏に Jones の悪口を言う。このために一時の感情 (passion) で人を罰したり、召使いを追い出したりしたことのない Allworthy 氏が立腹して、その日のうちに Jones を追い出してしまう。Jones は Sophia を後にして行くことを考えて、彼の心はちりぢりに引き裂かれるが (VI, XII), 苦しみ悩んだあげく、Sophia をあきらめて別れの手紙を書く。

everything here flows from *a heart* so full, that no language can express its dictates. (VI, XII)

「ここに書いてあることはどれもこれも胸からどんどん流れ出て来るので、どんな言葉もその良心の命令を表わすことはできません。」

因に、Fielding が知っているという最も完全な人についての描写の中で、

his house, his furniture, his gardens, his table, his private hospitality, and his public beneficence, all denoted *the mind* from which they flowed, ... (VIII, I)

「彼の家、彼の家具、彼の庭園、彼のテーブル、彼の個人的接待、彼の公的慈善、すべてが心を意味しその心からすべてのものが流れ出て来る」という文があるが、これと上記の

兎玉： Henry Fielding の *Tom Jones* における「人間」と「心」と「哲学、宗教」

手紙の文の意味即ち「あらゆるものが心（胸）から流れ出る」というのが Fielding の根本的思想の一つである。

Sophia 宛の別れの手紙を書く Jones にとって一つだけ気がかりなことがある。それは彼女がどんなことがあっても彼の願いをかなえてくれるかどうかの決心を確かめていないことである。だから手紙の中で

I know the goodness and tenderness of *your heart*, ... (VI, II)

「僕はあなたの心の良さと優しさを知っている」と一言書かざるを得ないのである。

Jones が追い出されたことを知った Sophia は女中の Honour 夫人と相談して二人で家出して Jones を追いかけることになる。Sophia は Jones を何度もつかまえそこなのであるが、ある日全く偶然にも Jones がある夫人を待っている旅館の応接間へ Sophia がかけ込んで来る。最初は二人ともあまりの突然に言葉も出ない。彼女の方は相当ご機嫌斜めで、しばらくやりとりが行なわれるが、その間中彼女は震えて立っており、顔色は雪以上に白く、彼女の胸（heart）はコルセット越しに震えている。Upton でのことが話題になると Jones は

... *my heart* was never unfaithful to you. (XIII, XI)

「僕の心があなたにそむいたことは一度もありません」と言い、更に

... if *my heart* had not been engaged, she, ..., was not an object of serious love. (XIII, XI)

「僕の心が向けられていなかったら、あの女は真面目な愛の対象ではない」と弁解する。だから

Sophia in *her heart*, was very glad to hear this; (XIII, XI)

「Sophia はこのことを聞いて心の中では非常に喜んでいる」のである。

物語がいよいよ終りに近づき、Western 家の一室の鏡の前で Jones が Sophia の姿、形をほめたたえた後、彼女が、

If I am to judge of the future by the past, my image will no more remain in *your heart* when I am out of your sight, than it will in this glass when I am out of the room. (XVIII, XII)

「今までのことからこれから先のことを判断すれば、私のあの（鏡の中の）姿は、私がこの部屋から出て行くと鏡の中にないのと同じように、私があなたに見えない所へ行くとあなたの心の中には残らないでしょう」と言うと、Jones はいや断じてそんなことはない。

it (i. e. your image) never was out of *my heart*. The delicacy of your sex cannot conceive the grossness of ours, nor how little one sort of

amour has to do with *the heart*. (XVIII. XII)

「あなたの姿は僕の心から一度も出て行ったことはありません。女心の優しさでは男心の粗雑さはわからないし、ある種の恋愛が心とどんなに関係のないことがないかわからないでしょう」と言う。

Jones と Sophia が教会で結婚式を挙げた晩は皆本当に上機嫌でしあわせである。今まで最もふしあわせだったものが最もしあわせになる。

as great joy, especially after a sudden change and revolution of circumstances, is apt to be silent, and dwells rather in *the heart* than on the tongue, Jones and Sophia appeared the least merry of the whole company. (XVIII, THE LAST)

「大きな喜びというものは、特に突然事情が変わったり改まったりした後では、よく沈黙し舌の上よりも寧ろ心の中に住むので、Jones と Sophia はそこにいるみんなの中で一番楽しくないように見えるのである。」

このようにして物語はいよいよ終りに近づくのであるが、もう一度 Sophia と Jones の心はどんな心であるか、Fielding が考える心はどういうものであるかを考えてみたい。

先ず Sophia の心は

a heart as good and innocent as her face was beautiful; (X, V)

「彼女の顔が美しいのと同じように善良でけがれのない心」であり、

whatever his (i. e. her father's) apprehensions or fears have been, if I know *my heart*, I have given no occasion for them; (XVIII. IX)

「父の心配や恐れが何であっても、もし私が自分の心を知っていれば、その原因を与えることはない。」というのは父の同意なしに結婚はしないというのが私のいつもの決った考えであり、これが子の親に対する義務だと思うからと Sophia は言う。

the dutiful, grateful, tender and affectionate heart (XVIII. II)

「従順で、感謝に満ちた、優しい、愛情のある心」こそ Sophia の心なのである。

次に Jones の心は

the noblest generosity of *heart* (XVIII. IV)

「最も気高く寛大な心」であり、

great goodness of *heart* (XVIII, IX), great goodness of *heart* (XVIII, X)

「大きく善良な心」である。前者は Sophia と Allworthy 氏が話している場面で Sophia が言い、後者は Miller 夫人が Sophia が Jones について語ったと言う場面で用いられる

表現である。Sophia が Jones の心について二度も同じ表現をしていることが意味深長である。更に Allworthy 氏と Jones が話している場面で、Allworthy 氏が Jones に向って

I am equally astonished at the goodness of *your heart*, ... (XVIII, XI)

「わしも同じようにお前の心の良さに驚いている」と言う。Jones の心の善良さ (goodness) を Fielding がどんなに強調しようとしているかが十分理解できるようである。

最後に Fielding は心について

many a man who commits evil is not totally bad and corrupt in *his heart*. (VIII, XV)

「不善をなす人はその心の中が全く悪く堕落しているとは限らない」と述べている。この考え方を *Tom Jones* という物語に登場する全人物にあてはめると根っからの悪人は一人もいないということである。これは人間には大なり小なり欠点はあっても、本心は善であるという Fielding の根本的考え方の一つであって、Fielding 自身の心の善良さをも物語っているものと考えられる。

次の例でも彼の考え方が十分わかると思う。一般的に疑い (suspicion) というものは心 (heart) から生ずる。

as it (i. e. suspicion) proceeds from *the heart of the observer*, so it dives into *the heart of the observed*, ... (IX, X)

「疑いは観察する人の心から生じるように、観察される人の心の中にはいり込んで行って」その心の中で、言わば、胚の最初の状態である悪を発見すると言う。Fielding は更に続けて、疑いというものは悪い心 (bad heart) からいつも生じるのではないかと考えていたが、実は

I never knew it (i.e. suspicion) the property of a *good one* (i.e. heart). (IX, X)

「疑いは善良な心の特徴であることを今まで知らなかった」からだと告白している。更に

Nor will all the qualities (i. e. genius, invention, judgement, learning, knowledge, conversation) I have hitherto given my historian avail him, unless he have what is generally meant by a *good heart*, and be capable of feeling. (IX, I)

「私の作家が一般に良い心と言われるものを持っていないで、感じることはできないならば、私がこれまで私の作家に与えて来た数々の特質は全部彼には役立たないだろう」と述べている。「善良な心を持っていて感じることはできる」これこそ彼が強調したい考え方

の一つである。

3. Spirit について

Fielding は *spirit* という語を *mind* や *heart* とは反対に, the dejected spirits of Mr. Jones (XVII, V) の 'dejected' という epithet を使っているのを除いて, すべていい意味に用いている。*Tom Jones* の中で *spirit* という語が用いられているコンテクストにおいて特に重要と考えられるものだけを取り出して論じてみたい。

Jones had naturally violent animal spirits, (V, IX)

「Jones は生来激しい動物的元気を持っている」ので、彼がある旅館で男に頭をなぐられて怪我をしてベッドに寝ている時でも、

his spirits were too lively and wakeful to be lulled to sleep. (VIII, I I)

「彼の元気はあまりに生々として目覚めているので、なだめすかされて眠ることはできない」し、一方7時間も眠ると全く気分がさわやかになって「全く完璧な健康と元気」(such perfect health and spirits) (VIII, IV) を回復するのである。実際に彼は魅力ある体格をしており、

... if a very fine person, and a most comely set of features, adorned with youth, health, strength, freshness, spirit and good-nature, can make a man resemble an angel, he (i. e. Jones) certainly had that resemblance. (IX, II)

「若さ、健康、力、新鮮さ、気力、気立ての良さで引き立っている非常に立派な人、非常に整った容貌が、もし一人の男を天使に似るようにすることができるとすれば、彼こそ確かにそれに似ている」し、また彼はこの世で一番男前の青年であり、更にその顔には優しさと気立ての良さがあり、このことが彼の顔立ちの特徴になっているので、

... the spirit and sensibility in his eyes, though they must have been perceived by an accurate observer, might have escaped the notice of the less discerning, ... (IX, V)

「彼の眼の気魄と感受性は、正確な観察者には感知されたに相違ないが、それほど識別する力のない人の眼にはとまらなかったかも知れない。」この気立ての良さが非常に力強く彼の顔色の中に描いてあるので、それを彼に会う殆んどの人が話題にする。彼の顔に殆んど言い表わせない心の細やかさがあるのは非常に素晴らしい顔色のせいであると同時にこの気立ての良さのせいであり、その気立ての良さに男性的体格と態度が備わっていないとすれば、彼の態度はあまりにも女性的であったかも知れない。そして男性的体格と態度は

Hercules のそれに似ているし、気立ての良さは Adonis のそれに似ているのである。その上

He was ... active, genteel, gay, and good-humoured; and had a flow of *animal spirits* which enlivened every conversation where he was present. (IX, V)

「彼は活発で、上品で、陽気で、上機嫌であり、彼のいる所ではどんな話でもはずませる流れるようなはつらつとしたものを持っている」のである。

さて Fielding は上流生活と下層生活を比較して、前者の気取りは後者の素朴さから見るとまばゆくこっけいに見える。そして又下層生活の粗雑さ野蛮さは上流生活を支配する礼儀正しさと比較したり、対置したりする時、馬鹿馬鹿しさという強い考えと衝突する。その上、実は、わが作家の態度はこれら両者のおしゃべりによってよりよくなっていくものである。というのは作家は下層生活の中に率直、正直、誠実を容易に発見するし、上流生活の中に優雅、上品、心のゆとり (*liberality of spirit*) を発見するからである。

which last quality (i.e. *liberality of spirit*) I myself have scarce ever seen in men of low birth and education. (IX, I)

「この最後の特質を身分の低い生れで低い教育の人の中に私自身は見たことはほとんどない」と Fielding は言っている。

さて、Jones は身分の低い生れどころか生れのわからない捨て子 (*foundling*) であり、低い教育どころか全然学校というところに行ったことのない (VII, XII) 青年である。このような青年が心のゆとりを持っている。いや Fielding が持たせている。それほど作者はこの青年に愛情をそそぎ大いに期待をしながら彼をよりよく描こうとしているのである。

Fielding は

all women love a man of *spirit*. (XV, IV)

「女性は全部気力のある男性を愛する」と言うが、Jones を愛している

Sophia, with all the gentleness which a woman can have, had *all the spirit* which she ought to have. (X, IX)

「Sophia は女が持ち得る優しさをすべて備えており、女が当然持つべき気立ての良さを全部持っている」のである。生来激しい '*animal spirits*' を持っている Jones と女が当然持つべき気立ての良さを全部持っている Sophia が結婚するとどうなるであろうか。

最後に

that generosity of *spirit*, ... is the sure foundation of all that is great

and noble in human nature. (XII, X)

「気前の良さこそ人間性の立派な気高いものすべての確実な基礎である」とFieldingは言う。

4. Soul について

6月のある夕方 Jones が美しい木立の中を歩きながら Sophia のことを想像してまるで彼女を眼の前にして語りかけるかのように独り言を言い始める。

my Sophia, if cruel fortune separates us for ever, *my soul* shall doat on thee alone. The chastest constancy will I ever preserve to thy image. Though I should never have possession of thy charming person, still shalt thou alone have possession of my thoughts, my love, *my soul*. (V, X)

「僕のソファイア、たとえ残酷な運命が僕達を永遠に引き離すことがあっても、僕の魂はあなただけを愛します。最高の貞節をあなたの面影に対していつまでも持ち続けます。僕はあなたの魅力ある姿に接することは決してなくても、それでもあなただけに僕の考え、僕の愛、僕の魂を捧げます」と Jones は言う。

Jones と Sophia はお互いに愛していることを間接的に知るように、*heart* という語の場合と同様に、Fielding は表現する。

宿屋の女主人と Honour 夫人と Sophia のいる場面で、女主人は

... he loves Madam Sophia Western to the bottom of *his soul*. (X, IX)

「あの人は Sophia Western お嬢さんを心の底まで愛しています」と言うし、Honour 夫人と Jones が話している場面で、夫人は

... you are a generous, good-natured gentleman, and I am sure you loves her (i. e. Sophia), and to be sure she loves you as dearly as *her own soul*; (XV, VII)

「あなたは気前がよく気立ての良いお方で、きっとお嬢さんを愛していらっしゃるし、確にお嬢さんもあなたを自分自身の心と同じ位深く愛していらっしゃいます」と言う。

Jones が Allworthy 家を追い出されてからすぐ Sophia と Honour 夫人は彼の後を追いかけるが、London へ着くまでの間に何度も追いつ追われつの状態をくり返す。Sophia は父親に追いつかれるのは恐しいが、Jones に追いつかれるのを考えてもあまり恐しくない。いや、実を言えば、彼女は追いつかれるのを恐れるというよりむしろ望んでいる。というのは、

it (i.e. the wish) was one of those secret, spontaneous emotions of *the soul* to which the reason is often a stranger. (XI, III)

児玉： Henry Fielding の *Tom Jones* における「人間」と「心」と「哲学、宗教」

「その望みは理性ではしばしばわからない心のあの秘密の、自然の情緒の一つである」からである。

Jones がある男に頭をなぐられて怪我をして旅館のベッドに寝ている時、女主人が来て、

A poor man hath a soul to be saved, as well as his betters. (VII, XIII)

「可哀そうな人も、その目上の人と同様に、救われる魂を持っている」と言う。これは一般的なことを言っていると同時に、Jones の現在の憐れな状態に対して同情する発言でもある。

Jones が Partridge に *Spectator* の中に出てくる二人の恋人の話、即ち二人が遥かに遠く離れている時、ある一定の時間に月を見に行き、同じ時間に同じ物を見ているのだと考えて楽しんでいた話をする時、

Those lovers, must have had souls truly capable of feeling all the tenderness of the sublimest of all human passions. (VIII, IX)

「その恋人達は人間の激しい感情全部の中で最も崇高なもののもつ優しさ全部を本当に感じることでできる魂を持っていたに相違ない」と言う。「その恋人達」というのは「Jones と Sophia」のことを間接的に表現しているのであり、「感じることでできる」というのは heart の項の終りで述べたように、Fielding の強調したい考え方の一つであるから、彼が Jones と Sophia をあらゆる角度から可能な限りより美しく描こうと努力しているのが理解できる。

5. Sense(s) について

Tom は狩猟が非常に好きのために、Sophia の父の Western 氏のお気に入りになって、彼女や Western 氏としばしば食事を共にする。Tom は Sophia に対して必ず尊敬を表わしながら特別に振舞う。

This distinction her beauty, fortune, sense, and amiable carriage, seemed to demand; (IV, V)

「彼女の美しさ、運のよさ、感じ方、親しみのある振舞のためにこんなに違ったふうに彼は振舞う」のである。

ある午後 Jones が近くの林を散歩していると、Thwackum と Blifil が丁度やって来て、些細なことでもなぐり合いを始める。丁度その頃同じ林の中を Western 氏とその妹の Western 夫人と Sophia が散歩をしている。Western 氏は三人のなぐり合いに気づいてしずめようとして走り回り、Western 夫人は Blifil の血を見て倒れた Sophia を助けようとし

て走り回る。その間に Jones は気を失っている Sophia を腕にだいて近くの小川へ連れて行こうとするが、Western 氏に気づかれて彼女をそっと下す。その瞬間 Jones は彼女をそっとなでる。

... had *her senses* been then perfectly restored, (the tender caress) could not have escaped her observation. (V, XII)

「もし彼女の五感がその時完全に回復していたら、彼女はそっとなでられたことに気づいただろうに。」

ところで Sophia はどんな女性であるか。

she had a very deep *sense* of religion. (VII, IX)

「信心深いところがある」し、女中の Honour は Sophia に向って、

you are a woman of *sense*; (XI, VII)

「お嬢さんはよく気のつくお方です」と言い、Jones は散髪屋に向って Sophia のことを

No eye ever saw any thing so beautiful; but that is her least excellence. *Such sense!* such goodness! (VIII, V)

「どんな眼もあんなに美しい物を今まで見たことがない。でもあれはたいしたことじゃない。あの感覚は!あの人の良さは!」と興奮しながら言う。Fielding は Jones に Sophia の外的な物と内的な物を比較させながらこのように言わせているのだが、Sophia 自身はおばに向って

I am born deficient, and have not *the sense* with which other people are blessed; there must be certainly *some sense* which can relish the delights of sound and show, *which* I have not; (XXV I I, I V)

「私は生れた時から欠点がありますし、他人が持っている心が私にはありません。音楽や芝居を楽しむことのできる感覚というものが確かにあるでしょうが、私にはそれがありません」と言う。Sophia と従姉がしゃべっている場面で、従姉は

I will venture to assert, as a fact, that a man of *sense* rarely behaves very ill to a wife, who deserves very well. (XI, VII)

「一つの事実としてどうしても言うのですが、気の利いた男性は自分にふさわしい妻には滅多にひどいことはしません」と言う。話がここまで進んで来ると、'a man of sense' は誰のことを 'a wife' は誰のことを Fielding が言おうとしているかは、'sense' のある人であれば、十分理解できることである。

6. Eye(s) について

これまで扱って来た五つの語即ち *mind, heart, spirit, soul, sense(s)* と *eye(s)* とは直接関係がないように思われるが、仮に心(*mind*) というものに「外の心」と「内の心」があるとすれば、「外の心」はいわゆる五感に相当し、その代表的なものが眼である。従って眼はその人の心の一部を表わすものと考えて、これから *eye(s)* という語の現われるコンテキストのうち重要と考えられるものを取り出して論じてみたい。

Tom Jones という物語の中で、女主人公の Sophia が初めて登場する時

... adorned with all the charms in which nature can array her; bedecked with beauty, youth, sprightliness, innocence, modesty, and tenderness, breathing sweetness from her rosy lips, and darting brightness from *her sparkling eyes*, ... (I V, I I)

「自然が盛装させうるすべての魅力で飾られ、美しさ、若さ、陽気さ、けがれのなさ、慎み深さ、優しさで装われ、ばら色の唇からは甘さを漂わせ、きらきら輝く眼からは明るさを放ちながら」愛らしい Sophia は現れる。その眉毛は真似のできないぐらいきれいで美しくアーチ型をしており、

Her black eyes had a lustre in *them*, which all her softness could not extinguish. (IV, II)

「その黒い眼には光沢があり、その光沢は彼女のどんなもろさでも消すことのできない」そんな眼をしている。Sophia の心の中に Jones への愛がだんだん芽ばえようとしているので、

What her lips ... concealed, *her eyes*, her blushes, and many little involuntary actions, betrayed. (V, II)

「その唇が隠していることをも、その眼が、その恥らいが、何気ないちょっとしたいろんな行為が、表に現わす。」一方 Tom に Sophia の美しさが印象を与えるのは彼女が16になるころであり、

Tom, who was near three years older, began first to cast *the eyes* of affection upon her ... (IV, VI)

「三つつ年上の Tom は彼女に愛の眼差しを初めて投げ始める。」そして Jones の心が征服され虜にされるのは

... all the dazzling brightness, and languishing softness of *her eyes*; (V, IV)

「彼女の眼のきらきら光る明るさ、うるむ優しさ」によるのではなくて、小さなマフによるのである。

Fielding は美人の魅力とつまらないものについて

... the finest woman in the world would lose all benefit of her charms in *the eye of a man* who had never seen one of another cast ... (V, I)

「二度と女を振り返ったことのない男性の眼にはこの世で一番立派な女でもその魅力のもつすべての恩恵を失うものである」というのは、どんな立派な女性でも男性と違って引き立て役 (foil) が必要である、その役を演ずるのは高価なものではなくて、しばしばつまらないものであると言う。Jones が初めて Sophia の愛の虜になったのはマフというつまらないものが原因であるし、再び彼女の虜になったのはハンカチというつまらないものが原因である。

... the greatest events are produced by a nice train of little circumstances; and more than one example of this may be discovered by *the accurate eye*, in this our history. (XVIII, III)

「最大の事件でも相当いろいろなつまらない事情によって作り出され、このような実例を一つならずいくつも正確な眼はこの物語の中で発見しているかも知れない」と作者は言い、この世については次のように考えている。

The world may indeed be considered as a vast machine, in which the great wheels are originally set in motion by those which are very minute, and almost imperceptible to *any but the strongest eyes*. (V, IV)

「この世は実際に巨大な機械と考えられるかも知れない。その機械の中で大きな歯車が、視力の最も強い眼以外のどんな眼にもほとんど感知されない非常に細かい歯車によって元来動かされているのである。」最も強い眼であればこの世の動きが感知できると言う。

Fielding は読者に向って

If thou hast seen all these (i.e. many things) without knowing what beauty is, thou hast *no eyes*; if without feeling its power, thou hast no heart. (IV, II)

「もしあなたが美とは何であるかを知らないで沢山の物を見るとすれば、あなたは眼を持っていない。もし美の力を感じないで物を見るとすれば、あなたは心を持っていない」と言う。感じること (feeling)こそ Fielding の強調したいことの一つであるが、上記引用文の後半を言いかえると、次のようになる。「美の力を感じながら物を見るとすれば、あなたは心を持っている」更に「あなたは心を持っていれば、美の力を感じながら物を見ることが出来る」ということであろう。結局これは2. **Heart** の結論と大体同じことであろう。

お わ り に

以上 Henry Fielding の *Tom Jones* における *mind, heart, spirit, soul, sense(s), eye(s)* という語とそのコンテクストから作者が狙っているものを探し求めて来たのであるが、次の文をこの研究の結びにしたい。

... philosophy makes us wiser, but Christianity makes us better men. Philosophy elevates and steels the mind, Christianity softens and sweetens it. The former makes us the objects of human admiration, the latter of divine love. ... philosophy and religion may be called the exercises of the mind, and when this is disordered, they are as wholesome as exercise can be to a distempered body. They do indeed produce similar effects with exercise; for they strengthen and confirm the mind, till man becomes,

Firm in himself, who on himself relies,
Polish'd and round, who runs his proper course
And breaks misfortunes with superior force⁽¹⁾ (VIII, XIII)

「哲学は私達をより賢い人間にするが、キリスト教はより良い人間にする。哲学は心を高揚し鋼鉄にする。キリスト教は心を優しくし和らげる。前者は私達を人間の賞賛の対象にし、後者は神の愛の対象にする。哲学と宗教は心の運動と呼んでよい。心が乱れている時、運動が病気の体に良いように哲学と宗教は心の健康によい。哲学と宗教は実際に運動と同じ効果を作り出す。というのは自分自身に依存し、正しい道を走り、より勝れた力で不運を打ちくだく人間が自分自身の中でしっかりと磨かれ円くなるまで、哲学と宗教は心を強めるし固めるからである。」要するに、成長する人間にとって心を強め固めるものが哲学と宗教であるということになるだろう。

(1) Firm から force までは Horace のラテン語の詩を Mr. Francis が訳したものである。